
世界を渡る竜

海響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を渡る竜

【Nコード】

N9357T

【作者名】

海響

【あらすじ】

16歳の葛城忍は、バイトの帰り道に轢かれそうな猫を助け死亡・
・異世界エレンティアに両性の竜人をして転生することとなる。
赤ちゃんからの再スタート!!!の物語です。

初めての投稿するので拙い文章ですが、暇つぶしにでも読んでいただけたら嬉しいです。

誤字・脱字等あったらお知らせいただければ幸いです。

仕事の都合で不定期更新ですが、なるべく頑張りたいと思っております。

ます。

プロローグ（前書き）

初投稿のドキドキです。

変なところがありましたら、ご連絡ください。
お手柔らかに。

プロローグ

「伯父さんたち心配してるだろうなあ・・・」
家路に急ぎながら洋菓子店のバイトであった出来事を思い出す。

「ごめん！忍ちゃん！！今日は、19時まで入ってもらってもいいかな？」

慌てた様子で店長の木村さんが話しかけてきた。

「大丈夫ですよ。でも今日の交代番は、佐藤先輩ですよ？遅れるなんて珍しいですね。」

佐藤先輩は、時間に正確でいつも5分前には必ずバイトに入っていた。

「あゝ電車が遅れていて時間に入れないと連絡があったんだ。忍ちゃんには申し訳ないんだけど・・・」

このバイトも高校入学と同時に始めて10ヶ月。ようやく慣れてきて頼りにされるのも嬉しい。

「気にしないでください。困ったときはお互いさまです。」
「本当に良い子だなゝじゃあ頼んだよ。」

それから30分くらいすると佐藤先輩が到着した。

「ごめんね。葛城さん！遅くなっちゃったね！！」

「大丈夫です。そんなに慌てなくても・・・。」

「いやいや！女子高校生が遅い時間に危ないから、気をつけて帰ってね。」

「ありがとうございます。お先に失礼します、お疲れ様でした。」

頭を下げながら挨拶すると、木村さんと佐藤先輩が労いの言葉をくれそのまま少し他愛のない話をしてバイトを上がった。

この言葉が最後の会話になるとは思わずに・・・

・・・気が付くと地面に横たわっていた。

あれ？体が動かない。それに顔の横で猫が鳴いてる。

周りもなにやら騒がしいが何を言っているのかわからない。

ああそつだ猫を追いかけて道路に飛び出したんだ。

そこを思い出していた。

バイトの帰り歩道の植え込みから猫の鳴き声が聞こえた。

植え込みを覗き込むと、そこには真っ白な猫が寂しそうな声で鳴いていた。

「君もひとり？寂しいのね。私も・・・」

私の両親は小さい頃に交通事故で亡くなって、伯父夫婦の家でお世話になっている。

伯父夫婦は自分の息子達と隔たりなく可愛がってくれるが、やはり本当の親ではないので甘えられない。

そんなことを思いながら猫を抱き上げようと手を伸ばすと、猫が私の横をすり抜けて逃げてしまった。

「そっちは車道よっ！！」

そう叫びながら私も車道に飛び出してしまった。

右側から強いライトの光を感じた。

ああそうか。私は車に轢かれたんだ。

なんだか眠くなってきた・・・私も両親のもとへ行くんだわ。

伯父さん、伯母さん・・・あんなに可愛がってくれたのにごめんなさい。

やがて迫りくる闇の中に意識が吸い込まれていった。

プロローグ（後書き）

語彙・文章力もありませんが、ここまで読んで下さった方！ありがとうございます。

誕生（前書き）

アクセスありがとうございます。

お気に入りにしてくださった方々ありがとうございます。
感激です！！

誤字等ございましたらお知らせ下さい。

誕生

竜人達が住む地域サラスにあるクローゼ家の屋敷では、廊下をメイド達が忙しなく行き来していた。

そんな中で一人の少年が、両親の居る部屋を目指し荒々しい足取りで駆けている。

青色の髪に金色の切れ上がった瞳、とても整った顔の少年だ。

バンツ！！

「御父様！生まれたのですね！！」

16・17歳くらいの少年が扉を開けて飛び込んできた。

「フェス。そんなに慌てて困った奴だ。とても可愛い子が生まれたよ。」

少年がもう少し成長し、落ち着いた感じの顔の男性は苦笑しながら答える。

「そんなに慌て危ないわよ」

「御母様、早く赤ちゃんに会いたかったです。」

「そんなに慌てて怪我でもしたらどうするの？兄の貴方がしっかりしなくてはね。」

蜂蜜色の髪に碧い瞳の母親が窘める。

「そんなことより赤ちゃん・・・」

ふて腐れた顔しながら言いつつも、目線は母親の横にあるベビーベツトに釘付けた。

そんな息子に苦笑しながらも母親は微笑ましそうだ。

「うわ〜珍しいっ！白銀の髪だ！！しかもカワイイ！！」

兄のフェスニストはベビーベツトの中を覗き込み、笑顔で両親に話しかけた。

「あれっ？この魔力・・・」

そんな息子に困った顔をしながら、父親が話を切り出した。

「その子はこれから色々困難が待ち受けているだろう。だが、私達が支えて幸せにしてやるう。」

「御父様、もちろんだよ。その努力は惜しまないよ。」

「それにこの子は・・・なんだ。」

「えっ・・・まさかっ!？」

「いくら私でもこんな冗談は言わない。」

「たとえこの子がそうでも、家族だから何も変わらないよ。」

「ああ幸せにしてやるう。」

やり取りを黙って見ていた母親は、安堵した微笑みを浮かべていた。

始まりの声（前書き）

このお話は、誕生前の忍視点のお話です。

総合PV1000突破!!ありがとうございますm(_____)m

始まりの声

温かい・・・とても安心する・・・

ここが天国なのかしら？

・・・ずっと居たいなあ。

お父さん、お母さんは何処にいるのかしら？

とてもやさしい声が聞こえる。

・・・お母さんかしら？

声を聞けなくなっただけかなりの年数が経っているけど、こんな声だったかなあ？

今は何故だか身体がうごかないの・・・会いに行くから

うう 苦しい。痛い。

ここはお母さん達のいる天国じゃなかったのっ！？

その時、不思議な声が聞こえてきた。

『貴方には、役目があります。他の人には出来ない役目が・・・心優しい愛し子よ。』

えっ！？誰？？

私が何をしなければならぬというの？

『時がくれば・・・』

切ない、何故か懐かしいような声が話しかける。

『時間です。行きなさい・・・』

待って！まだ、聞きたいことがっ

ああ体が引っ張られるっ！！

忍が居なくなつた空間に一人の女性が現れた。

白銀の髪、蒼天の瞳のとても静謐な空気を出している女性だ。

『今度こそ幸せに・・・』

忍がその声を聞くことはなかった

誕生（忍視点）

「おぎゃーっ！おぎゃー！！！」

私は不思議な声とのやり取りから、突然明るい世界へと出た。

眩しい・・・何っ！！

体が動かない・・・でも全身で叫んでいる気がする。

「おぎゃーっおぎゃー。」

わたしっ？私の口から赤ちゃんの泣き声が出ているっ！？

「元気な御子がお生まれです！」

「っ！？この御子はっ！！！」

誰かが息を呑む声が聞こえてきた。

どういうこと？わたし・・・もしかして転生した？一度は死んだのだから転生よね？

そんな事を考えている内に、気が付くとベットに寝かされていた。生まれたばかりで目は見えないが、軟らかい生地にふかふかとした感じが背中にあたる。

やがて母親らしき人の声が聞こえてきた。

「この子の行く末は・・・貴方・・・。」

「私の気持ちは変わらない。お前もだろう?」

「もちろんよっ!でもっ!!」

「そんなに興奮するな。少し落ち着け、産後の体に良くない。それに心配する気持ちはもつともだ。そのためにはフェスニストの協力が必要だが。」

なんだろう?私、変なのかな?

だんだん不安になってきた・・・この先どうなるんだろう?

バンツ!!

「御父様!生まれたのですね!!」

突然の声に驚きながら、今後のため話を聞くために集中する。

盗み聞きのように気が引けるが、自分自身のことなのであまり考えないことにする。

その後は家族らしいやり取りをしていたが、途中から様子が変わった。

「あれっ?この魔力・・・」

えっ!?!魔力?私、魔力あるんだ!!

どうやらファンタジーな世界に転生したらしい。

前世でもファンタジー小説好きだったので気分が上昇する。

「その子はこれから色々困難が待ち受けているだろう。だが、私達が支えて幸せにしてやろう。」

「御父様、もちろんだよ。その努力は惜しまないよ。」

そんなやり取りに感動していた私を衝撃が襲った。

「それにこの子は、”両性の原種に近い竜人”なんだ。」

っ！？リヨウセイ？ゲンシユニチカイリュウジン？？

なにそれ・・・わたし人間じゃないの？

たしかに周りが話している言葉は知らない言葉だけど、意味は理解できるし・・・。

目が見えるようになったら・・・そのことを考えると恐くなる。

「えっ・・・まさかっ!？」

「いくら私でもこんな冗談は言わない。」

兄と思われる人物も驚いた様子だ。

そんな兄に父親が落ち着いた様子で話しかけている。

「たとえこの子がそうでも、家族だから何も変わらないよ。」

「ああ幸せにしてやろう。」

そんな兄に父親が安心した様子で答えている。

これから家族になる人達の気持ち嬉しかった。

人間でないのは不安だが、きっとこの家族がいれば大丈夫な気がする。

前世では失ってしまった大切な家族・・・でも、新たな家族が迎え

入れてくれた。

その気持ちを胸に秘め、眠りの世界に落ちていった。

兄弟？兄妹？？（前書き）

少しも話が前に進みませんが、温かく見守って下さい。

この話の大体の流れは頭の中で完結まで出来上がっています。
書きたい話がありすぎて時間が足りないし、文章力が無さ過ぎてま
とめられません。

他の方はどうしているのでしょうか？すごいですよね。

兄弟？兄妹？？

俺、フェスニストにどうやら兄妹が出来るらしい。

母様いわく「絶対つ女の子よ！」だそうだ。

・・・正直、元気に生まれてきてくれるのなら、どちらでも良い。基本的に竜人の子供は少ない。子供が少ないという事は必然的に竜人全体数も少ない事になる。原因は長命種に見られがちな、”妊娠率の低さ”だ。そんな中で兄妹が出来ることは、とても珍しい。

ここ最近の上機嫌さは、職場で不気味さ満載だったらしい。補佐の仕事をしている者からも、遠回しな言い方だったが注意された。でも、無意識だから仕方がない・・・。それに兄妹が出来る事は、すでに周りに告げてある。生まれたら、すぐに会う為の根回しだ。

昨日の夜の感動を頬を緩ませながら思い出していた。

仕事終了の時間が近づいてきた頃、使用人が知らせを持ってきた。

「フェスニスト様。急いでご帰宅を、お生まれになられます。」

夕方頃に御母様が産気づいて、すぐに知らせに出たらしい。俺は取り乱していた気がする、仕えられる側として対応できたかどうか……。

「わっわかった。すぐに戻る、遠くまですまなかった。」

同僚達が「もう、いいから帰れ」と送り出してくれた。

馬を急がせながら晴れた夜空を見上げると、流れ星が視界の隅を横切った。

あつ！と思つて見上げていると流星群のようで、次から次へと流れていった。

「天も祝福してくれているのだな……。」

心が弾むのを感じながら、双つの月が照らし出した夜道を屋敷へと急いだ。

屋敷に戻ると、そこには新しい家族がいた。

竜人らしく尖った耳、初めて見る白銀の髪……中性的に整った顔。そして何よりこの魔力っ！

「あれっ？この魔力……。」

言葉に出してしまったらしい、御父様が困った顔で話しかけてきた。

「その子はこれから色々困難が待ち受けているだろう。だが、私達が支えて幸せにしてやる。」

その言い方に少し違和感を覚えたが、俺の気持ちはこの子が生まれ

る前から決まっている。

「御父様、もちろんだよ。その努力は惜しまないよ。」

だが、このあと言われた言葉に衝撃を受けた。

「それにこの子は、”両性の原種に近い竜人”なんだ。」

「えっ……まさかっ!？」

「いくら私でもこんな冗談は言わない。」

驚いたなんてものじゃない。

”両性の原種に近い竜人”なんて今や教科書の中か、小さい頃から聞いている物語で聞くくらいだ。

この子の将来を思うと心配になる……でも少し前に見た流星群を思いだした。

「たとえこの子がそうでも、家族だから何も変わらないよ。」

「ああ幸せにしてやるっ。」

天にも祝福されて生まれて来る子が、不幸になんてなるはずない。たとえ不幸が襲い掛かってきても、俺が、俺たち家族が支えて幸せにしてやるっ。

新たな決意に心が温かくなるのを感じた。

「フェス、また張り付いてるの？」

突然話かけられ、昨日の回想から突然呼び戻された。

両親が呆れた顔をして、ドアの近くから俺のことを見ている。

「今日は仕事お休みなの？」

「来ても仕事になりそうにないから、今日は来るなという知らせが朝のうちに来ました。」

「……………」

両親はさらに呆れた顔で、こちらを見ている。

別にどんな目で見られようと、此処を動くつもりは無い。

「御母様、そんな目で見るのは止めてください。あと、仕事を休んだのは正解でした。」

「どうして？」

理解出来ないような顔で聞いてくる御母様に重要なことを伝えた。

「この子の事を確実に聞かれますよ、妹？弟？って。これからの方針を家族で話し合ってからでないと答えられないでしょう。」

「…………それもそうね。」

「そうだな、それを考えると今日休んだのは正解だ。私の仕事は家で済ませられるものだけだったからな。」

そんな俺に向かって、御母様が「さきに！」とばかりに魅力的な言葉を発した。

「この子に名前をつけてあげなくちゃね。この子の名前は、可愛い名前がいいわ。」

その言葉を聞いて、今日は家に居たことを竜神様に感謝した。

竜人にとって名前とは大きな意味を持つ。

どんな親でもこのときばかりは真剣に悩む。

この子が将来強くなれるために、俺は考えていた事を両親に伝えた。

名前

私がいるベットを囲んだ三人を困惑しながら見ていた。

「この子に名前をつけてあげなくちゃね。この子の名前は、可愛い名前がいいわ。」

「いいえ。御母様、強くなれるような名前が良いと思います。」

「いやいや。この子の将来が明るくなるように”光”に因んだ名が良いと思う。」

発端は、母様が言い出したことだが……今は收拾がつかなくなってきた。

ここには4人しかいない。他にいないので誰も止めてくれない。居たとしても誰にも止められないような気はするが……。

「強くなれるような名前って、例えばどんなの？」

「それは、”ガイアス”とか”ダンテス”とかですよ。」

「あーっ！！」（そんな名前はイヤッ！！）

思わず抗議の声を上げてしまった……いくらなんでもそんな名前は嫌だ。

前世では女の子だったので、男らしすぎる名前は受け付けない。

勝手に「兄様センス悪い」と思いながら、兄様から顔を背け「頼みは両親のみ」とばかりに二人を見上げる。

「この子も嫌だと言っていいわよ。」

「御母様、分かっていますね。これは喜びによる雄叫びです！」

兄のフェスニストが自信に満ちた様子で、拳を握り締めて言った。その部屋に沈黙が襲い掛かったのは言うまでもない。

「フェス。貴方はもう黙っていなさい。」

沈黙の中、いち早く立ち直った母様が言った……たぶん息子のゼンスの無さに思考が停止してしまったのだろう。

私の外見は、周りの言葉を聞いている限り白銀の髪に青銀色の瞳、顔は中性的（赤ん坊で中性的とかあるのかなあ？）な造りだが、どちらかといえば可愛い部類に入るらしい。

そんな私に考えた名前だから……母様の衝撃も理解できる。

「何故です!？」

「……話をするだけ無駄だわ。」

母様はヒラヒラと手を振りながら、呆れた顔を隠しもせず兄様へ言い放った。

兄様は部屋の隅でブツブツ言っているが、この際存在を気にしないことにする。

「カッコイイのに……」とか聞こえてくるが、忘れることに集中する。

「この瞳を見てよ。キラキラしてるわ。可愛い、やっぱり可愛い名前が必要だわ。」

母様が頬に手をやり、うっとりした顔で見つめてくる。

「さつきから何を言っているんだ。参考までに一応聞くが、可愛い名前というのは？」

父様が何を聞いても大丈夫とばかりに真剣な様子で母様に話しかける。

「エルフィーネ」が第一候補ね。」

そんな父様へ自信満々に答える母様。

兄様が誰に似たか垣間見えた気がしたが、前世が女の子だった事もあり、そんな可愛い名前は大歓迎だ。「母様センス良い。名前可愛い」と笑顔声援を送りながら見つめる。

「・・・悪くは無いが、将来の事を考えるともう少し慎重になったほうが良い。」

そうだった・・・私は両方の性を持って生まれてきてしまったのだった。

最初は驚いたがもう慣れてしまった。慣れとは恐ろしい。

魔力もその影響で大きいらしく、どうやら竜人の原種、竜に近いらしい。

あまり詳しくは話してくれないが（あたりまえだが）、父様が「光」に因んだ名前」と言ったときは単純に嬉しかった。

この先、私は必ず原種に近い事が原因で苦労する。そのことは避けられないが、私の将来が幸せであることを願っていることが分かる言葉だったからだ。

「そうね。その通りだわ。」

「仕方が無いさ。君はずっと女の子だと思っていたのだから。」

「なんとなく女の子のような気がしたただけだったの。でも、この子が両性だろうと私の大切な子の変わりはないわ。」

「もちろんだよ。でも、まさか私達の間から原種に近い血が生まれるとは思わなかった。」

「それは私もよ。貴方が言った通り」光”に因んだ名前にしましよ
う。」

その話を聞きながら私は涙が出るかと思った。

きつと心地よい空間は母様のお腹の中にいた時のことだろう。

意識は分からないが、体は確かにお腹の中にいたはず。

でも私は死んだと思っていたから、前世の両親の事ばかり考えていた。

これからはこの二人の子供として、”精一杯生きていこう”そう思った。

「子のこの名前は、”フィニティス”にしよう。”ティスは古代言語で”光”という意味がる。」

「すごく良い名前ね。この子も気に入るかしら？」

「ああ〜う〜。」

了承の意味で両親に向かって笑顔で答えた。

「うふふ、気に入ったみたいね。”フィニティス”だから愛称は”フィー”か”フィニス”かしら？」

「そうだな。これからお前は”フィニティス”だ。」

「きゃう〜う〜。」（うれし〜。）

嬉しくて、笑顔で答えた。

部屋の隅では存在を忘れられた兄様が、いまだに何事かを呟いていた。

3歳の誕生日（前書き）

今回は、説明じみた感じですが。

うまく話の中に盛り込むことが出来ませんでした。

誤字・脱字等ございましたら、ご連絡下さい。

3歳の誕生日

此処は、異世界エレンティア。

竜人達が住まうサラスのクローゼ家の屋敷では大勢の竜人達が集まり、フィニティスの3歳の誕生日が行われていた。

「フィニティス誕生日おめでとう。」

「フィーちゃん、あめでとう。」

「フィー、3歳の誕生日おめでとう。」

父様、母様、兄様の順で祝いの言葉をくれる。

「とおしゃま、かあしゃま、にいしゃま・・・ありがとう。」

照れて俯きながら言葉を返すと、三人はそれぞれに微笑む。

「御父様、後からエルも来ると言っていました。」

「そうなのか？たしか任務で遠方に行っているのではなかったか？」

「それが、やっと長い任務を終えて、こちらに向かうために現地を発ったそうです。昨日手紙が届きました。予想だともうそろそろ来ても良いころだと思えます。生まれた時も会いたがっていましたし。」

「そうか、体は大丈夫なのか？」

「大丈夫だと思います。かなり体力ありますし、何と言っても武門ミレキア家の出身ですからね。」

「そうだな。」

そんなやり取りをしていると、足元に小さな影が近寄って来た。

「とおさま、誰が来るの？」

「ああ、エルローゼ。フェスの婚約者だ。」

「こんやくしゃ……。」

（たまに出てくる名前だと思っていいたら兄様の婚約者だったんだ。会うの楽しみ。）

だが、フィニティスは同時に不安になった。

自分が生まれた家は、竜人の中でもかなりの高位の家だ。属性の代表である”オブ”を名乗っている家である。

”竜人達が住む地域サラス”となっているが、”サラス”とは一つの国のようなものだ。

”教会・議会・長”の3つが集まり、話し合いをしてサラスを運営している。

その内の”長”とは、気が遠くなるような昔から不在の位となっている。

”長”になるためには、条件が必要だからだ。

その為、現在サラスを運営しているのは”議会”と”教会”となる。

”教会”とは、原種の竜・始まりの竜の女神を信教する宗教である。

”議会”は、それぞれの属性の代表が集まった組織のことである。

竜人は、それぞれ血統により得意な属性があり、”水・地・火・風・

闇・光”の中で1番その力が色濃く出たものが、代表である”オブ”を名乗る事を許される。

その為、”オブ”は属性に一人ずつ、六人しかいない。

その六人の内の一人が、父、オズワイドなのだ。

（私も……婚約者、決まっているのかな。）

その不安を感じたのか、オズワイドがフィニティスに話しかける。

「フィニティス、お前の兄はエルローゼに初めて会った時に求婚したのだ。勝手に婚約者を決めるような事はないよ。竜人は直感で生涯の伴侶を決める、いつかフィニティスも解るようになる。」

「おっ御父様！？何を言い出されるのですか……。」

フェスニストは慌てた様子で、父の続く言葉を遮ろうとしたが間に合わない。

「いくら竜人が一目惚れの種族だからと言っても、求婚から婚約までその日の内に済ませてしまった。」

「ジョウネツテキでえすね、にいしゃまオトコらしいです。」

「あっあうっ」

うろたえているフェスニストを横目に話はどんどん進む。

「いいでしゅね！あこがれでしゅう。どんなかたなのでしょう？」

「それは……。」

その時、部屋に扉をノックする音が響いた。

執事が扉を開く前に、外側から凄い勢いで開いた。

「失礼致します。案内も待たずに申し訳ございません。お久しぶりにございます。」

二十歳前後の女性が腰を折って挨拶していた。

筋の通った鼻梁、アーモンド形の大きな紫色の瞳、結い上げた金の髪の美しい女性だ。

「フィニティス様には、お初にお目に掛かります。エルローゼ・イス・ミレキアと申します。以後、よろしくお願い申し上げます。」

「はっはじめましゅて、フィニティス・オブ・クローゼともうしゅます。こちらこそ、よろしゅくおねがいたしゅます。えるろーぜねえしゅま。」

フィニティスは見蕩れてボーっとしていたが、ハツとして慌てて挨拶した。

「まあ、ありがとうございます。姉様だなんて、どうぞエルとお呼びください。」

「では、えるねえしゅまとおよびさせてくだしゅい。」

そう言ったフィニティスを見て、エルローゼは感極まる。

（「イス」ってことは、貴族のお嬢様だあ。お嬢様、初めて見た！それにしても竜人は美形しかいないのかな・・・背も高い人が大きいし、私も将来大きくなるのかな？）

自分のことは棚に上げて、初めて見る家族以外の上品な女性に感動を覚えていた。

竜人達に貴族の概念は無い。

あるのは、その血統がどれだけ原種の血に近いか？である。

フィニティスは「貴族」と考えたほうが判りやすい為、そのように判断するようにしている。

人間側も竜人達のように竜の血を感じ取れる能力など無い為、名と姓の間に入る名称で血統を確認、人間側でいうところの、どれだけ王家⇨竜に近いのか？の確認を行っている。

そのため、人間側からすれば貴族と変わらない。

濃い順に”ロード⇨王家・オブ⇨公爵、侯爵・イス⇨伯爵・テス⇨子爵、男爵”といった括りになる。

”ロード”は”長”のみに与えられるので、今のところ存在しない。ちなみにクローゼ家は、”水”の属性の”オブ”だ。

その属性しか使えない訳ではなく、あくまでその系統の血筋だといっただけだ。

髪や瞳に属性の特徴が出やすいので、大体は外見で属性が判る。

ちなみにフィニティスの家族は、父〓水・母〓光・兄〓水である。

フィニティスは原種〓始まりの竜に近いとされているため、属性はいまだ不明だ。

フィニティスがキラキラしている瞳で見上げていると、エルローゼがハツとしたように誕生日の祝辞を述べた。

「御誕生日おめでとうございます。遅くなりまして申し訳ございません、フィニティス様に見蕩れてしまいましたわ。」

フィニティスはその言葉に真っ赤になって俯いたまま言った。

「ありがとうございます。ねえさまこそ、きれいです。」

その言葉にエルローゼは、口元を押さえて後ろを向いてしまった。

「ねえさま。ぐあいわるくなりましたか？」

オロオロしながらフィニティスがエルローゼを伺うが、手で覆っているため顔は見えない。

するとそのこに、父のオズワイドが声をかけた。

「エル、どうした？フィニティスが心配しているぞ。」

「オズワイド様、きちんとしたご挨拶もせず、申し訳ありません。

お話には聞いていたのですが・・・やられてしまいましたわ。」

名前を出さなかったが誰を指していった言葉か、顔を覆ったまま言ったエルローゼを見れば一目瞭然だ。

「クローゼ家に居る者は、全員、不治の病に侵されて末期だ。」

そんなエルローゼへ冗談めかしてオズワルドが答える。

だが、二人の会話を聞いてはいても意味不明なフィニティスに、復活した兄のフェスニストが声を掛ける。

「フィー、向こうに美味しいケーキがあるから食べに行かない？」

「わあい。いきましゅ。」

移動している二人に声を掛けたそんな視線が集まっているが、フェスニストがすべて遮っている。

親しい者だけでもかなりの人数がいるので、料理もかなりの豪勢さだ。

その中にあるケーキを目指して歩くフィニティスは、自然とウキウキしてしまう。

そんな姿を周りで見っていた者達は、皆、微笑ましそうだ。

（なんか前世でいうところの、中世もヨーロッパってん感じよね。歴史は得意じゃなかったけど、文明もそれくらいのような気がする。それにしてもケーキは前世と少し違うけど、おいしいからなあ〜早く食べたい。）

前世では、御菓子好きが高じて洋菓子店でバイトをしていたほどである。

そんなことを思いながら兄に手を引かれてケーキがある場所に向かっている、一人の男性が近寄ってきた。

「フェスニスト様、ご紹介していただけませんか？」

声を掛けられた瞬間、フェスニストから怒気を籠めたオーラが噴出された。

フェスニストはきつくフィニティスの手を握りしめ、男に言葉を返す。

「これは、サクト殿。わざわざ有難う御座います。」

フェスニストが冷たい言葉で答える。

(兄様……。でも、こちらの世界にも空気読めない人いるのね。)

今日のフィニティスは、白銀の髪を隠す為に魔術で髪を瞳と同じ青銀色に変えている。

それでも血統は隠しきれるものではないらしい、ちなみに服装はヒラヒラした薄ピンクのドレスに、同色のバラを髪に飾った女の子の格好だ。

竜人の年齢は、見た目と同じとは限らない。

その竜人の最高潮の能力時に成長が止まり、寿命が近づくにつれて少しずつ老化が進む。

それでいくと目の前の男性は、兄と同じくらいに見えるが・・・年齢は判断がつかない。

位は兄の方が上のようなのだが、失礼にならないように挨拶すべきかと思っていると兄が先に口を開いた。

「サクト殿には、まだまだ紹介できる年齢ではございません。」

「っ!？」

痛烈な嫌味にサクトは絶句する。
確かに血統が下位だが、こんな扱いを受けるとは思いもよらなかつたのである。

フェスニストからすれば、竜人には珍しく「女好き」であり悪い評判しか聞かない、サクト・テス・イバーリに紹介するなど「ふざけるなっ！」の一言である。

サクトの父は、出来た人物で有名のだが息子の教育には失敗したらしい。

そもそも、下位の者から上位の者へと声を掛けること事態が非常識なのである。

父親の事が無ければ今日も招待などされなかったのだが、本人は自分の能力なら当たり前と過信していた。

サクトが絶句している間に、兄はフィニティスを連れて歩き出した。大丈夫なのか心配になり、後ろを振り返ろうとするが兄に話しかけられその思いも霧散する。

「フィーは、どんなケーキが良いかな？クリームがついたのが良いかな？」

「クリーム！」

フィニティスの頭の中は、ケーキのことでいっぱいだった。

誕生日とその後(前書き)

うう・・・進まない。

誕生日とその後

フィニティスはケーキを次々に口に運んでいた。

目の前で見えているフェスニストは、温かい目でそれを見ている。そして、そんな二人を周りは微笑ましそうに眺めている。

そんな中、フィニティスは何かに気づいたように兄を見た。

「にいしゃまは、たべないのお？」

「あとで戴くよ。今はフィーを見ているからいいの。」

何故か兄からハートが飛んだ気がしたが・・・気のせいだろう、そう思いたい。

「フィー、そのケーキを食べたらベットに入る時間だよ。」

「まだ、きたばかりでしゅよ。」

フィニティスは一応、無駄だと思いながら上目遣いで、兄に言うてみた。

「もう一刻（１時間）も食べ続けているのだから、いつもよりずっと遅いよ。」

「えっ!？」

フィニティスは父から貰ったばかりの懐中時計を出して時間を確認した。

（本当に21時じゃん！もっと居たかったのに、何で夜から始めるのよお。）

昼間は仕事をしている者が多い為、開始時間が遅い時間になってしまったのだ。

因みにこの世界の一日は、26刻、前世で考えるとこの26時間という事になっている。

普通、竜人の子供でもまだ時間を理解する事は出来ない。

だが、フィニティス自体が異例づくしのため、今更、家族に驚く者などいない。

「フィー、良い子だから、ベットに入ってくれるよね？」

フェスニストが笑顔だが、何故か威圧感を感じさる顔で聞いてくる。そんな顔で聞かれて断る勇氣など、フィニティスは持ち合わせていなかった・・・即座に頭を縦に振る。

「おやすみのごあいしゃつして、いきましゅ。」

「フィーは本当に良い子だね。食べ終わったようだし、御父様達の所に行こうか？」

「はい。」

満面の笑みで言った兄に、フィニティスは小さな声で了承した。

兄に促され、重い足を動かしながら両親達の元へと向かうのだった。

執事のアイオスに連れられて行くフィニティスを見送りながら、フ

エスニストにオズワイドが口を開いた。

「よく、フィニティスが大人しく眠る事を了承したな？」

「フィーは良い子ですからね。」

しれっとした顔でフェスニストが答える。

「フェス、フィニティスに聞かれたくない話をしたかったのではないか？」

苦笑しながら言った父に了承の意を示し、少し奥まった席へと移動する。

「御父様、サクトがフィニティスに目を付けたようです。」

微笑みながら話し出したフェスニストだが、目が全く笑っていない。
。。。

「アレは、もはや病気だ。しばらくは放っておけ。」

「解りました。それともう一件、しばらくすけば『聖約の儀』があります。そのことについても対策を考えて置かなければなりません。」

「その話は、後ほど部屋で話そう。エルローゼも加えて話した方が
良いだろう。」

「御母様は？」

「私たち夫婦では、もう話し合って結果は出ている。あとはどのよ
うな対策をするか、お前達と話を詰めるだけだ。」

「要は、俺達三人に任された訳ですか？責任重大ですね。」

「お前の母は”光”の血統の出身だからな、荒事には向かないのだ。
それを自分でも理解しているから任せるのだろう。信頼されている

ということだ。」

「了解しました。最善の策を講じましょう。」

父の言葉に、嬉しさを隠しきれない。

「では、皆が寝静まった後にお伺いします。話し込んでいて、招待客を任されたままの御母様が、怒りださないうちに戻りましょう。」

「もう、手遅れな気がするが、此処に呼んだのはフェスだからな。任せたぞ！」

「そんなあ。おとうさまあー……………」

この後、フェスニストは母に叱られ、一人遅れて父の書斎に向かったのだった。

過去・未来・・・そして安らぎ

目の前で男の人が横たわっている。

黒い髪の男性は、目を硬く閉ざしたまま動かない。
目を凝らして見ても胸に呼吸の動きが見られない・・・死んでいるのか。

静か過ぎて耳鳴りがする。

辺りは静まり返り、自分の鼓動がうるさいくらいだ。

なぜ自分はこんなに胸が苦しいのか、この男を知っている・・・？
いや、この顔を見たら二度と忘れないだろう。

頭が痛い、胸が苦しい・・・何か体の奥から飛び出してきそうだ。

「
つ！！！」

フィニティスは、ハツとして目が覚めた。

一瞬、自分が何処に居るのか判らない。

息が詰まる・・・うまく息が吸えない・・・。

「
うつうつ・・・」

涙が頬をつたう。

苦しい、あの人を失った事が・・・。

「っ!？」

あの人は誰のことだろう。
夢?

見たところは覚えているに、夢の内容が思い出せない……。
いったい自分は、何を知っているというのだろうか?
分からない……。自分のとこなのにも何も分からない。

涙が次々と頬をつたう。

寂しい……。一人が寂しい。

コンコン。

その時、部屋にノックの音が響いた。

返事をしないまま音がした方を見ていると、ドアが内側に開いた。

父が、伺うように部屋に入ってくる。

「フィニティス？」

ベッドの上に起きているフィニティスを不思議そうに名前を呼ぶ。

「とっ……。さつま……」

その声に初めて、涙を流しているフィニティスに気づいた父は、微笑んで近寄りフィニティスを抱きしめる。

「フィニティス、どうした？」
「っう……」

父の温もりに、また涙が溢れる……何も答えられない。
よほど怖い夢でも見たのだろうと、父は抱きしめる腕に少し力ちからを籠める。

「フィニティス、窓の外を見てごらん。」

父の腕の中から窓の外を見上げる。

「この部屋を、窓の外から双月が見守ってくれている。我等が始祖原種を生み出した女神は双月に住んでいる。だから安心して眠りなさい。お前は、一人じゃない。今日は一緒のベットに眠ろう。」

その言葉に安心したかのように、フィニティスは瞳を閉じる。

父の胸の鼓動が子守唄になり、やがて可愛い寝息が漏れ聞こえてくる。

覗き込んでみると、オズワルドの服を握り締めフィニティスが眠っている。

「おやすみ、フィニティス……」

月の光が優しく差し込む部屋に、父親のやさしい声が空気に溶けた

聖歌(前) (前書き)

今回短めです。

聖歌（前）

フィニティスは、教会にある祭壇のの荘厳な造りに見とれていた。

陽の光によつて、浮かび上がるステンドグラス。

壁の両側、上の方から床に向かってステンドグラスの光の線が伸びている。

祭壇の両側には、ガラスのような素材で出来た竜が内側から発光し、辺りを温かく照らし出していた。

中央の通路を挟んで数人が着席できる席に家族で着席し、今か今かと開始時間を待っている状態だ。

周りには結構な数の竜がいる、今日は年に数回聖歌隊が”竜の聖歌”を歌う特別な日だ。

フィニティスが教会に訪れる事になったのは、数日前にあった兄と父の会話によるものである。

「御父様、そういえば『聖約の儀』の前に教会へ行っておかないと、拙いのではないですか？」

『聖約の儀』は主に、教会が主体で執り行われる。

人間・竜人、両側にとっての未来に大きく関わることの一つだ。

「そうなんだが、教会は権力が別だからな。様子を伺っているうちにかなり迫ってきてしまったし、近いうちに連れていくか。」

「それが良いかと・・・でも、そこまで様子を伺うということは何か動きがあったのですか？」

「いや、いまのところは確認されていないが・・・あの誕生会からこちらを気にしているようだ。恐らく誰かから話を少し聞いた程度だろうが、警戒するに越したことはない。聖女など祭り上げられたら大変だからな。本人が望むなら別だが・・・。」

「御父様、でも本来なら両性の子供が生まれた場合、”教会に知らせるように”となっていたはず、大丈夫なのですか？」

「大丈夫だ。その辺の事は、考えてある。それにお前は、フィニテイスが色々な世界を見ないまま、教会に閉じ込められて良いと思っているのか？」

「そんな事は考えていません！フィーが一人になるような事がないのか・・・心配なのです。」

意地悪い顔をして聞いてきた父に対して、少し興奮してしまった事を恥じるようにフェスニストが答える。

「解っているよ。ただ実際に行動に移すには、もちろんリスクを伴う。だがそろそろ決断しなければな。」

「はい。」

「まあ、とりあえずは、教会に行き様子を見よう。流れによっては実行に移す。先日、話した通り、臨機応変に頼むぞ。出来るだろう？」

「誰に聞いているのですか？御父様と御母様の子ですよ。」
「頼んだぞ。」

その言葉に微笑みで答えたフェスニストは、この部屋に近づいてくる小さな気配に気づく。

「御父様、フィーが来たようですよ。」

「ああ、そのようだね。せっかくだから話しておくか。」
「それがいいですね。」

こうしてフィニティスは、教会へ向かう事になったのだった。

聖歌（前）（後書き）

この話を作成中に、兄が後ろから覗き込んできた。
もちろん言葉という暴力で撃退しましたが、危うく秘密がバレるところでした。

聖歌（中）（前書き）

遅くなりました。

読んでくださっている方々に感謝を！

聖歌（中）

フェスニストは、先ほどから動かないフィニティスの様子を伺う。上から見下ろされているのも気づかないようだ。

「フィー」

小声で話かけてみたか反応が無い。
少し心配なり、顔を覗いてみた。

そのとたんフェスニストはギョツとする。

フィニティスの瞳の中、瞳孔の近くにいくつもの『星』が強く煌めいていたからだ。

『星』は、特に魔力の強い者に発現する、瞳の中の煌めきの事をそう呼ぶ。

以前からフィニティスに『星』はあった・・・だが、此処までハッキリしたものはなかった筈だ。

竜人は基本的に魔力が強い者が多い種族なので、『星』を宿しているの者は多い。

だが、此処まで多く、強い光を放っている『星』を持つ者をはじめて見た。

まだ、始まってもないのに、教会に來ただけでこの反応・・・始まったらどうなるのか。

フェスニストの背を冷や汗が流れる。

母親の隣に居る父親に、フィニティスの事を目線で伝える。

父親も気づいていたようで、その目は大丈夫だと力強く伝えてくる。その瞳を見てハツとした。

何を自分は焦っていたのだ、『星』は竜人であれば多く宿していて

も何とか説明がつく。
落ち着いた事を父親に目線で伝えて、フィニティスのことを気にしながら、前に向き直る。

ちょうど主となる神官の両側、少し後ろに聖歌隊が揃ったところだ。

厳粛な空気の中、神官の祝詞が終わり、いよいよ聖歌が始まる。

神官の合図によりソレは、教会いっぱい響きはじめる。

高く、低く、不思議な音程。

すべてを包み込む暖かな、自然を育む賛歌。

その歌を聴いた瞬間、フィニティスの身体を衝撃がはしった。

(私、この歌知ってる・・・懐かしい・・・胸が熱い)

フィニティスは聖歌隊を見つめる、いや、その先にある何かを見つめていた。

歌に心を浸す、頬を涙が伝ってゆく、わかっていても止められない。胸が熱さで詰まって、何かが溢れてしまいそうだ。

(これは、歌ではなく”詩”だったはず・・・また聞けるなんて・・・)

フィニティスは、前世より前の記憶を持たないはずだ。

なぜ、自分がこんな事を想うのか、通常なら気づくことも気づかない。

フィニティスには、これ以上自分の中の想いを抑えるのが難しかった。

涙を流しながら、ソレを開放した・・・

教会に幻の雪の結晶が降る・・・

温かく、優しい・・・白銀に煌めく雪の結晶・・・

聖歌隊も呆然としながら、上を見上げている。

神官も、参列していたすべての竜人達が、雪の結晶が降ってくる先を見上げている。

聖歌は止んでいるはずなのに、結晶と共に、優しい詩が聞こえる。

詩は、心を癒し、結晶は、身体を癒してゆく・・・

フェスニストは、奇跡の光景を見上げながら、何かに気づいたようにフィニティスを見た。

聖歌（後）

フェスニストは自分の左に下を見て、その目を見開き、数瞬、呆然としてしまう。

フィニティスは、発火してしまいそうなほどの熱と、それとは逆に凍えてしまいそうなほどの想いを詩にのせ、その可憐な口から次から次へと紡いでゆく。

その詩に反応したのか、両親がかけた魔法が髪の毛の根元から解けて、青銀から白銀の光に変化して、その変化は今もお止まらない。肩より少し下まである髪の毛、耳の辺りまで白銀に輝いていた。しかも何やら胸の辺りから少しだけ光が漏れ、涙を流しているフィニティスの相貌をより神秘的に魅せている。

動揺から一転、引き締まった顔をしたフェスニストは、状況を判断するため周りに視線をはしらせる。

どう考えても今、この現象を起こしているのは、自分の隣にいる小さな竜人だろう。

まだ、その事実気づいた者は自分達家族以外いないだろう、いや、いないと思いたい。

自分の反応の鈍さに俯きそうになるのを、歯噛みしながら堪える。

（反省は、すべてが終わったあとだ）

必ず守ると誓った想いだけを胸に、フェスニストは自分に出来る最善の方法をとる事にした。

まずは、父親オズワイドに視線で合図を送る、すでに準備が出来ていた彼は、静かにソレとはわからないように小さく頷き返した。

確認したフェスニストは、自分の脱いだ上着でそつとフィニティスを包み、腕の中に大切に抱え込む。

何かしらの反応を起こすかと思われたフィニティスだが、静かに腕の中に納まつてくれているのに安堵する。

魔力の動きを悟られぬよう、彼女の耳元で囁くように眠りの魔法をかけるが、効いてくれるかは解らない。

効いてくれることを心の中で祈りながら、二人だけで右側面の扉に足を向ける。

ここで家族全員で抜けると目立ってしまう、二人だけでも通常時から十分目立つが、いまは皆それ何処ではない。

今のうちにと気が焦るが、ここで気配を断つと逆に不審に思われる可能性の方が高い。

気配は消さず、だが、目立たぬように、焦らずそつと足を進める。顔には出ないが、一刻もの時間に感じられたような、扉にたどりつくまでの短い時間。

着いたことで安堵しそうな自分を、まだだと叱り、扉の外に出る。

扉の外では、中で何が起きているかまるで解っていない見習い神官が、不思議そうに扉から出てきた自分達を見ている。

自分の緊張感をまるで感じ取れていなさそうな顔にい苛立ちを感じたが、気づかれても此方が困った事になるので、このくらいのがち

ようど良いと理不尽な怒りと抑える。

腕の中の妹を心配する兄の顔の下に黒い自分を隠しながら、人のよさそうな男に声をかける。

「すまない。妹が突然体調をくずしてしまって、どこか休める部屋はないだろうか」

突然、まれに見ない美形に声をかけられ、しばし呆然としていた男は言葉の意味を理解したと同時に動き出した。

「こっこっこっこちらです」

自分が見蕩れていた美形に、理不尽な苛立ちをぶつけられた事など露ほども知らない男は、緊張しながら前を歩き部屋まで案内する。こっという事態の場合、運び込む部屋は決まっている、その為、足取りは言動とは逆に動揺はみられない。

フェスニストは、少し前を歩く男の後姿を眺めながら、自分の緊張感が解れ、いつもの調子が戻ってきたことに気づく。

あまり緊張しすぎては、成功するものも失敗してしまう。

ゆっくり息を吐き、良い感じに緊張感から開放されたフェスニストは、「まだまだだなあ」と心の中で呟きながら、前を歩く男に心の中で少しばかりの感謝をするのだった。

聖歌の後、巡る策略（前書き）

やっと投稿することができました。

お気に入りにしてくださっている方々に感謝を！

すごく何かありそうなタイトルですが其処までのことは無いと思います。

聖歌の後、巡る策略

部屋に集まって居るのは、両親、フィニティス、フェスニストを入れた4人だ。

簡素な、だが、しっかりした造りの部屋にフィニティスを囲んだ形で話込んでいた。

だが、肝心のフィニティスといえば、いまだ眠り続けていた。水球とでも言ったらよのだろうか、薄く色が付いた水の膜に膝を抱えた状態で納まっている。

それを抱えた状態で椅子に腰掛けているフェスニストへ、水球に手を添えながら、父、オズワイドが尋ねる。

「フェス、フィニティスの状態は？」

「一応、状態は安定しているようですが、何しろ今までの事と勝手が違ってはつきりした事はいえません。」

「まあ、そうだろうな・・・私もここまででは想像していなかった。」

そんな父の言葉に「本当に？」と疑わしい目を向けながら、フェスニストは口を開く。

「とりあえず、精神に効果が高い『精癒』の膜で覆いましたが、果たして効果があるかどうか・・・」

心配そうな面持ちで話すフェスニストへ、母のレスキアーネが声をかける。

「フェス、貴方が精一杯の手を尽くした知っているわ。貴方の思いが詰まった膜に守られているのですもの、フィニティスにも伝わっ

「ているはず、大丈夫よ。」

「ですが・・・」

それでも不安を払拭できていない息子へ、母は、茶化したよな言葉を投げる。

「そんな顔をしていては、フィニティスの目が覚めたときに心配されちゃうわよ。兄として恥ずかしくないのかしら？」

「そっそれは・・・」

赤面し、うるたえる息子を見かねた父が、助け舟とばかりに話を遮る。

「それくらいにしておきなさい。それより今後のことだが・・・」

気をとりなおしたフェスニストは、姿勢を正して続く言葉を待つ。そんな生真面目な息子に苦笑しつつ、オズワイドは切り出した。

「まあ、今のところは何の動きも見られないが、レスの実家が動くと思う。」

「御母様の？」

「ああ、あそこは”光”の家だ、^{オウ}フィニティスに近づくこの機会を見逃すとは思えない。」

「たしかに、伯父様はフィニティスを気に入っていたようですし・・・」

「気に入っている」という言葉を選んだが、実際は自分の娘のような可愛がり様だ。

母の兄、伯父の行動は、まさに「目に入れても痛くない」と言った呈である。

「っ!？、まさかつ御父様は狙って、この日を選んだのですか!」

竜人達は、自分が決めた日に教会へ通う。

よほどの事情が無い限り、変更する事はない。

大声を出した息子を注意するように、煩そうに顔を顰めて頷く。

それを見たフェスニストは、大声を上げてしまった自分を恥じながら、小声で疑問を口にする。

「でも、なぜこちらから・・・っ!？」

「教えるような真似を？」と考えながら、何かに気づいた様子の息子に肯定を返す。

「そうだ、こちらもリスクは仕方がない。」

「・・・大きく出ましたね。あまり関心できませんが、フィニティスの為なら仕方ありません。それに”光”の中でも、伯父様はかなり敏感ですからね、何も言わなくても薄々気づいているような気がします・・・」

”光”は、他に比べて予知とまではいかないものの、そういう勘が突出している。

「それをはつきりさせておきたい。フィニティスの不利になるような事はしないだろうが、勝手に先回りして動かれても困る。」

「そう、うまく事が運べば良いのですが・・・」

大きなため息をつきながら、呆れた目を隠そうとせず、父に言葉を返す。

「運ばなければ、運ぶまでだ。」

その問いに笑顔で返してくる父に、息子の背に汗が流れる。

伯父の未来を思わずにはいられないフェスニストの耳に、来訪者を告げるノックの音が聞こえてくるのはそれから間もなくのことだった。

来訪者とは、フェスニストに未来を心配されていた伯父、その人だった。

巡る策略、竜玉への誓い（前書き）

ここまで待っていてくださった方々、有難うございます。

そして申し訳ないことに、だらだら意味の無い会話が続きます。
寛大な気持ちで読んでやってください。

巡る策略、竜玉への誓い

「伯父様・・・」

「なんだ、どうしたそんな顔をして？あつフィーが倒れて心配なんだな。」

伯父のデイレイスは、姉のレスキアーネとよく似ている華やかな顔に似合わない悪戯っぽい顔をしている。

引きつりそうになる口元を笑顔で隠しながら、伯父を部屋に入るよう促す。

何故かフェスニストの心を敗北感が占める・・・暗い顔にならないよう気をつけていると伯父の後ろからひょっこりと顔を出す人物が居た。

「私もよろしいでしょうか？」

伯父の息子、メイフィスだ。

フェスニストは焦った、自分の予定ではこの部屋に訪れるのは伯父一人のはずだった・・・。

（御父様は知っていたのだろうか・・・いや、知らないはずないか・・・）

フェスニストの予想を遙かに上回る父親だ、予想出来ないはずがない。

というか最初から息子も巻き込むつもりだったのだろう、今度の儀式にも関わってくる可能性が非常に高い息子共々親子そろって組み込むつもりだったのだ。

「ああ、メーフィスカ、久しぶりだな。少し背が高くなったか？」
「何をおっしゃっているのですか、この前フィニティス様の誕生会
でお会いしたばかりでしょう？」

クスクス微笑みながら答えるメーティスを見ながら、フェスニスト
は不思議に思った。

何故あんな軽薄な雰囲気を持つ伯父から、こんなしつかりした漢字
の息子が生まれたのかと・・・。

そもそもデイレイスは、色合いからいつて変わっている。

普通”光”の家なら”金髪”が基本だ、そんな中デイレイスの髪は
”赤”、しかも”深紅”だった。

”光”の家らしく瞳は琥珀色だが、”深紅”の髪は”火”の家の特
長にも関わらず、”火”ではなく”光”の代表になれるほど”光”
の力が突出していた。

本人はちつとも気にしていないらしく「この髪は太陽の色だ！」と
か言いながら最終的には、いつも豪快に笑っている。

何故そこで笑いが入ってくるのかフェスニストには理解できないが、
そんな伯父が嫌いではなかった。

そんな変人もとい伯父と違い、非常に出来が良い息子も共に巻き込
むと思うと申し訳ない気もしたが、フィニティスの事ともなれば仕
方が無い、そんな心の内を微笑みに隠しながらメーフィスにも部屋
に入るよう促す。

「よつオズ！この間は楽しかったぜ。今度フィニティス貸してくれ
」
「冗談は、態度だけで十分だ。見舞いに来たのに手ぶらか？」

笑顔なのに目が笑っていない父親に怯えながら、フェスニストは隣
に立つメーフィスを見た。

突然、問題発言をはじめた父親に、明るい金の髪とは対照的に青ざめた顔をしながら、窓の向こうに碧の瞳を向けている。

過去の色々を思い出しているのか・・・何を考えているのか分からないが、状況いまの空気を感じたくなかったであろうことは分かる。

フェスニストが同情の目線でメーフェイスを見ているうちに、何やら父親同士の話が進んでいた。

「まあ、難しい話は得意じゃないから、単刀直入に言う。俺達を仲間はずれにするなっ！」

「仲間はずれ？お前は子供か・・・無能に用は無いぞ。」

呆れながら言葉を返すオズワイドに、デイレイスが噛み付く。

「意地の悪い事言つなよーいじめっ子っ！」

部屋の気温が一気に氷点下にまで下がる。

窓の外を見ていたメーフェイスも現実逃避をしていられなくなったのか、父親を止めようと視線を送っている。

そんな息子の視線に気づかないデイレイスは、至って真剣なのだとアピールするためか言葉を止めない。

助けを求めてフェスニストは母の居る方へ視線を向けた、伯父達を迎え入れたときに預けた水球に収まったフィニティスを抱えながら、レスキアーネは部屋の雰囲気を見捨てるかのように自分達の周りだけに”光の結界”を張り、周りから隔絶した空間を造りだしていた。助けを求める視線に気づいたのか、レスキアーネは息子に微笑を返すだけで何も言ってくれない。

夫や弟を信じているのか、それとも頑張れと言っているのか解らないが・・・あの性格の母親だ。後者のような気がしてならない。

頼りにならない母親から冷気を出している父親に視線を戻し、この空気を払拭するため伯父の言葉をフォローする。

「御父様、伯父様は『俺達』と言っています。それは此処ココに居るメーフィスを指しているのでしょうか？それと”光の家全体オウケを指しているのでしょうか？それだけでも確認してみたらいかがでしょうか。」

「そうだな。頭は使えなくてもそれなりに役に立つかもしれんしな。」

「親子そろって俺のこと馬鹿にしてんの？」

「伯父様・・・私の言葉の何処どこに馬鹿にする言葉が含まれていましたでしょうか？」

「そんなもんは、雰囲気に出てるっ！」

「言いがかりですね・・・御父様、話にならないので後は任せました。」

諦めたような言葉を発するフェスニストに、「そんな」と言いたげな視線をメーフィスが向けてくる。

そもそも怒りからか言葉が崩れ出した恐ろしい父親に、これ以上フェスニストは何か言葉をかけるのは無理だ。

もはや自分しか父を守る者はいないとばかりに、メーフィスは奮起した様子で必死に言葉を発した。

「たしかに父上は馬鹿ですっ！考えなしかもしれませんが、フィニティス様を心配する気持ちは本物です。父上も本当はこんな話が出たかったわけじゃないと思います。お願いです！父上の話をもう一度聞いてあげてください。」

言葉とともに頭を下げて懇願するメーフィスに視線を向けながら、オズワイドがポツリと呟く。

「出来の良い息子に助けられたな。」

「当たり前だ。メーは俺と違って頭が良いからな。」

自分の息子に馬鹿呼ばわりされたにも関わらず、途端に上機嫌で自慢げに話し出すディレイスに三人は呆れた顔を隠せない。

「こいつに話を聞くより、息子と話をしたほうが話が進みそうだ。」

「そのようですね・・・御父様。」

「・・・・・・・・・・。」

メーフィスは恥ずかしそうに自分の父親を見ている。

きつと何処に行っても、自分が馬鹿にされている言葉に今のような言葉を返しているのだろう。

「まー冗談は此処までにして真剣な話をしようじゃないか。先ほどの答えだが『俺達』は、『俺、メーフィス』だ。」

「一言いわせてもらうが、君が一番話の腰を折っている。それに意外だな、愛する妻を除け者にするのか？」

「なわけないだろう。オズに負けないくらい妻のことは愛しているが、今回、『誓い』をたてるのが俺達二人だからだ。」

「誓い？何の誓いのことだ」

「とぼけるなよ。それが狙いだろう？」

悪戯を思いついた猫のような目で自分の父親を見る伯父に、寒気を覚えフェスニストは身を振るわせる。

(御父様の思惑に気づいていたというのか・・・)

「とぼけるとは何の事だか。だが、話は聞いてやるう。それに勝手に自分の息子も巻き込んでるが？」

「二人で話し合った結果だ。それにオズワイド、お前は”誓い”なくして俺達をお前の『秘密』に加える気がないだろう?」

オズワイドはその言葉に微笑で答える。

「よく解ってくれていて嬉しいよ。『秘密』に関わるために”誓い”をたてると言うなら、考えなくてもない。どうする本当に竜神に誓いを・・・」

そんなオズワイドの言葉を遮って、ディレイスがはっきりと言い切る。

「いや、”竜玉”に誓うつもりだ。」

その言葉を聞いたとたん場が緊張した。

”竜玉”とは、竜人にとって”命”だ、心臓が人としての”命”なら”竜”としての”命”が”竜玉”だ。

その竜玉に誓いをたてるということは、”命”をかけるという事だ。 ”竜神への誓い”も破れば竜人としての特殊能力を失うが、”竜玉への誓い”ほど重くはない。

さすがのオズワイドも此処までのことを言い出すとは思っていなかったらしく、珍しく困惑したように瞳を揺らしながらメーフィスに声をかける。

「メーフィスは承知しているのか。たとえ承知していたとしても、この重大さが解っていて言うとは思えない。」

オズワイドの瞳に心配の色を見たのか、安心させるようにニッコリとした笑顔を返しながら力強く答える。

「もちろん解つていて言っています。まだ、十五歳と幼いことは自覚していますが、そのままでしなければいけない事だと感じるのです。」

「それは”光”の血筋としてかな？」

「それもそうですが・・・”運命”を感じるのです。そうすることが当たり前のような・・・うまく言い表せないのですが・・・そもそも”竜玉への誓い”を言い出したのは私なのです。」

その言葉にフェスニストは驚きを隠せない。

どちらかといえば日ごろはおっとりとしているメイフィスが、今はかなり強気だ。

顔はどちらかと言えば女の子のように綺麗な顔だが、今はその顔が男らしく凛々しく見える。

「私は、本気です。」

その瞳の中に強い意志を感じたのか、オズワイドは問うような眼差しをディレイスに向ける。

「本当のことだよ。俺が強要したわけじゃないし、というか俺が強要された側だ。」

「まあ、ここまで言われて『秘密』に加えないわけにはいかないな・・・後悔が無ければいいが、ただ、二人が誓いをたてる事を君の奥さんは承知しているのかな？」

「当たり前だっ！俺はともかく黙ってメイフィスが”誓い”をたてた事がばれてみるっ！！俺は半殺しの上、ボロ雑巾よろしく捨てられる・・・」

想像したのかディレイスは青い顔をしながら最後は呟くように言った。

「そうか・・・そうだろうな。」

「そうだよ。あと、あいつが誓いをたてないのは、『フィニティスを大事に想っているが、それ以上に息子が大切だから自分は誓えないし、ほかより優先できないなら誓いをたてるべきじゃない。』といつていた。聞かれたら伝えてくれと頼まれた。」

「今日は一緒に来ていないようだが？」

「ああ、その場にいたら止めてしまいかもしれないから今日は来なかった。」

「わかった。では『寛大な心に感謝する』と伝えてくれ。」

頷き返すディレイスに、オズワイドが思いついたように聞く。

「それでいくとお前は、妻や息子よりフィニティスを優先するといっているようなモノじゃないか。」

「俺は、妻を愛しているからこそパートナーとして信頼している、一緒に戦ってくれる奴だと思ってる。それにメーは息子なんだから守る必要ないだろ。娘だったら考えたかもな。」

まとまりはじめた空気を感じたのか、それまで静観していたレスキアーネが声をかけてきた。

「ディレイス、先に言っておくけれど私も自分の子供が一番可愛い。いくら弟といえども助けてあげられないわよ。」

「承知の上だよ。メーフィスも解ってる。それに竜玉に誓ったら逃げられないしな。」

「わかってるならいいのよ。まあ、中途半端なことをするようなら精神に色々覚えさせようと思ったけどね。」

「・・・いくら俺が馬鹿でも、御姉様にお手間を取らせることは致

「しません。」

いままでの覚えさせられた精神（こころ）が珍しく丁寧な言葉を反射的に吐き出させる。

それを見て恐怖に震える体を抑えられない三人が、同情に満ち溢れた目でディレイスを見つめるのだった。

残照 記憶の欠片 (前書き)

ここまで読んで下さった方、有難うございます！

残照 記憶の欠片

……フィニティスは気がつくとも暗い場所に立っていた。

暗いが恐怖はない、逆に安堵にも似た暖かな感情を覚える不思議な空間だ。

辺りを見回しても何所も同じで変わらない。

(……ここ何処?)

……と、その時目の端に白が写った。

ぎよっとして見ると自分の手だ。

だが、それは見慣れている4歳の自分の手からはかけ離れた、日頃から剣を握っていることが判る、しっかりとした大人の手だった。辺りが暗く、はっきりしないが、自分が立っている位置からみると随分目線が高いように感じる。

ひよっとしたら、前世よりずっと高いのではないだろうか。

何が起こったのか判らず、とりあえず変わってしまった自分の身体を確認していると、横をふわりとした暖かい風が通り抜ける。

(あつ森の匂い……)

匂いを感じるとともに、画面が切り替わるように辺りの景色も変わる。

残照だけを残して沈んでいく夕陽、森は迫り来る夜の帳の中にその姿を隠そうとしていた。

しばらくそんな景色を眺めていると背に視線を感じる、慌てて振り

返ると一人の人間が立っていた。
背格好から男性というのは判るが、すでに顔がはつきりしないくらい辺りは夜の静けさを纏っている。

「・・・だれ？」

フィニティスは、顔を顰め不愉快を隠そうともせず問いかける。
不思議と不信感よりもどこことなく懐かしさを感じる、問いに答えない相手から伝わってくるのは、何故か好意のみ。
そんな相手を不思議に思い、警戒心も起こらず、確認しようと一歩踏み出そうと足を上げる。

ふわり

視界が黒に染まると同時に、目の辺りに体温を感じる。

「まだ早い。今しばらく安穩とした時間ときのなかで、しばしの休息を・・・」

同時に耳から吹き込まれた言葉は、男のようにも女のようにも聞こえ、高くも低くも聞こえる。
驚きからびくりと身体を揺らしてしまうが、若いのか、年老いているのか、いったい自分に何が起こっているのか疑問から抜け出せないフィニティスは再び問う。

「貴方はだれ？・・・此処は？」

フィニティスが問うと手の主は、突然、外界から遮断するように頭を抱えるように抱きしめた。

「此処で起こった事も、元の世界に還ればすべて忘れられます。だからいまは何も問わずに元の世界にお帰りなさい。」

「いや、いやよ。だって貴方から懐かしさを感じるもの・・・あなたはっ、貴方はだれなの？私、色々な大切な事を忘れている気がするの・・・」

「いずれっ・・・いずれ解る時がきます。すべてが其処へと向かっています。今は、まだ早い。」

頭を振りながら拒否するフィニティスに、手の主は苦しそうに言葉を返す。

それに対してフィニティスは、泣きそうになりながらも必死に訴える。

「何故っ！何故いまでは駄目なのっ・・・4歳の私では、幼すぎてはつきりしない事も今なら解る気がするの。忘れてしまっなら教えてくれないじゃないっ」

「いけません。ショックが大きければ忘れても心への傷は残ります。取り乱してはいけません。」

「・・・解らないことが多すぎるわ・・・」

諦めたようなフィニティスの耳に、癒すように優しい声が吹き込まれる。

「心の耳を澄ましてみなさい。貴方と呼んでいる声が聞こえるでしょう・・・」

その言葉に半信半疑ながら、深呼吸をして瞳を閉じる。

「・・・」

「・・・」

すると、何人かの囁き声のようなモノが聞こえる。

「さあ、在るべき場所へと戻りなさい。もう迷い込んで駄目よ」

「まだ、貴方のこと何も聞いていないわ。」

「貴方は、知っているはずですよ。今は忘れていても必ず思い出します。さあ、行きなさい。」

フィニティスの背後から送り出すような突風が吹きつけてきた。

それに押し出される寸前、ポツリと耳元にで呟かれた言葉に涙が零れる。

「愛しています・・・」

たしかにそう聞こえた。

高く高く押し上げられたフィニティスが最後に見た人は、自分と同じ色を持っていた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9357t/>

世界を渡る竜

2011年11月26日01時51分発行